2013.10

How?

羽鳥さんは、どのようにして楽しい講座を作っているのか？

相手の気持ちを想像することが全ての源。楽しませる企画力と心地よい場づくりを

ワークショップは自分のやる気や動機が大切ですが、やはり相手がいてこそのもの。どうやって居心地の良い空間を作るか、リピートしたくなる内容にするかといった想像力が必要です。小さなワークショップから数百人規模のセミナーの講師まで、多彩に活躍する羽鳥冬子さんに伺います。

取材・文◎吉川圭美　写真◎漆戸美保

Profile　羽鳥冬子（はとりふゆこ）さん　株式会社Bon22代表取締役。ライフスタイルコーディネーターとして活躍。公益社団法人日本アロマ環境協会理事・同協会認定アロマテラピーインストラクター、日本成人病予防協会認定講師・健康管理士、日本メディカルハーブ協会ハーバルセラピスト。著書に『アロマテラピー使いきり・組み合わせ辞典』『手作り石鹸と化粧品でナチュラルスキンケアきほんBOOK』（いずれもマイナビ）。

人気の秘密は、日々の勉強とおもてなしの心、そして情熱

大きな窓からやわらかな自然光が差し込む、某マンションの共用スペース。窓の外には緑の木々が風にそよぐ、なんとも心地よい空間――。

行われているのは、手作りアロマコスメのワークショップ。リラックスした雰囲気の中、7人の女性の前で説明をしているのは、ライフスタイルコーディネーター・羽鳥冬子さんです。

このワークショップ、実は7年前に区が主催していた講座の一つであり、あまりに評判が高くキャンセル待ちが続出したため、この場所でも開催することになりました。当時、サシェ作りやアロマの香り体験といった簡単なワークショップが多い中、コスメという実用的なものを作るということで、人気を博したのだと言います。

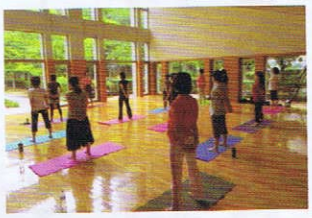
組み合わせにより、講座の内容は無限大!

羽鳥さんのワークショップ＆セミナー

アロマ×美容

近くに住む方たちが中心に参加する、手作りコスメのワークショップ。取材日は、ミントのひんやり感が夏にうれしい虫除けジェルと、羽鳥さんのブランド「F◆Y◆K」のブレンド精油を使ったルームスプレーを制作。参加メンバーは毎回ほぼ同じで、そのせいか、リラックスムードで楽しそうにしていたのが印象的だった。

アロマ×スポーツ



アロマ呼吸法のワークショップ。アロマを焚きながらストレッチすることで、通常以上の効果が出る。

美容×おもてなし

エステティシャン向けのおもてなしセミナー。客室乗務員の経験を活かしている。小学校や企業などでもさまざまな内容のセミナーを多数開催。

羽鳥さんは、アロマや美容、健康、食といったテーマでワークショップや講演を行ってきた、〝達人〟とも言うべき方。オリジナリティあふれるテーマと、親しみやすい語り口のトークが人気を博しています。最近では三國清三シェフと共に、レストラン「オテルドウミクニ」でワークショップを兼ねたイベントを開催。こちらも6回を数える評判のコンテンツです。

そんな羽鳥さんに、ワークショップへのこだわりを聞いてみました。

「まず内容については、一つのジャンルに特化しないよう意識しています。例えばアロマというテーマで話をする場合、美容、健康、運動、食事とさまざまなジャンルと結びつけて話をすることを心がけていますね」

ジャンルの壁を越えた話をするためには、アロマだけに限らない、幅広い知識が不可欠ですが……。

「私の場合、最初はアロマを勉強していたんですが、学ぶほどに『アロマを語るには、健康について知ることが必要だ』と思うようになりまして。興味のおもむくままにさまざまなジャンルの勉強をしていました」

そしてアロマテラピーインストラクターのほか、ハーバルセラピスト、健康管理士、フードアナリストなどの資格を2、3年の間で取得しています。

次に、他にはない切り口の企画を打ち出すようにするのもこだわりです。

「そのために、より多くのことを『体験』し、インプットするよう心がけています。どんなに食指が動かないようなところにも、チャンスがあった時はとりあえず行くようにしていますね。そこが灼熱のゴルフ場でも、『夢の島』でも（笑）。行けば必ず収穫がある。ヒントが得られることも多いんです」

車に乗る、ショッピングなどの趣味を楽しむ、といった何気ない行動も、意識しながら行うことでヒントが見つかることも。羽鳥さんが提唱する、アロマを焚いたスペースでストレッチを行うことで呼吸を深め、効果を上げるメソッド『アロマ呼吸法』も、こうした体験から生まれたものでした。

「日ごろからランニングをしているのですが、走る前にポケットに精油を忍ばせ、疲れた時に香りをかぐとリフレッシュ出来て、『もう少し走ってみよう』と思える。その経験をきっかけに、メソッドに進化させたものです」

さらに、おもてなしの心も大切、と羽鳥さん。

「ワークショップを開催する場所がどんなに殺風景な部屋でも、音楽や香りなど、工夫次第で、居心地の良いスペースにすることは可能。『いつまでもここにいたい』と思ってもらえるような空間づくりを心がけています。また、同じアロマというテーマでも、生徒さんが主婦なのか働く女性かで、関心の方向は大きく変わる。相手に合わせて、トークの内容も変えていきます」

さらに言えば、企画にこだわるのも、一人でも多くの人に楽しんでほしいというおもてなしの心から来ているのでしょう。ワークショップを通していかに楽しんでもらうか、何を持ち帰ってもらうか――。そのためには労を惜しまないと言います。ちなみに冒頭で紹介した三國シェフのワークショップでは生演奏が行われますが、実は羽鳥さんが自ら招待しているのだとか。そんなところにも、おもてなしの心が息づいているようです。

そして一番大切なこと、それは「情熱」だと語ります。

「私の原動力は、アロマの素晴らしさを一人でも多くの人に伝えたい、という気持ち。初めてアロマに触れた時の感動を、伝えたいと思っています。それには情熱がなければ出来ません」

日々の勉強とおもてなしの心と、そして情熱と。人気の秘密は何か特別なものがあると思いきや、意外にも普遍的なものでした。土台をコツコツ積み上げることこそ、人気ワークショップの近道であり、王道かもしれません。

取材協力◎株式会社Bon22（ボン・ヴァンドゥ） TEL03-6765-6000 http://www.bon22.co.jp/

視界・香り・音楽などを駆使した、五感のおもてなし。“ずっとここにいたい、また来たい空気”を作る

リピートが絶えず、常に新しい依頼が舞い込む、羽鳥さんのワークショップ。
成功のポイントについて、具体的なノウハウを紹介します。

話し方　さまざまな工夫で聞く人を飽きさせない

1. トーンを変える

主婦、OL、親子連れ……と参加者はさまざま。「子どもがいる場合は歌のお姉さんをイメージしながら元気よく語りかけたり、主婦向けの場合は、ざっくばらんな雰囲気で話します」

2. 体験談・共感できる話

羽鳥さんのトークの特徴は、体験談をふんだんに盛り込むこと。「最初は私もアロマと香水の違いが分からなかった」など、生徒さんたちと同じステージにいた時のエピソードを披露することで、緊張をほぐしてもらえるのだとか。特に長時間のセミナーの場合、時間が経つと中だるみしがち。そこでプライベートの話など、違う話を挟むことで、再び参加者の意識を話し手に向けることが出来る。

3. 教科書的な話をしない

「経験談や実用的な話を多くするようにしている」と羽鳥さん。教科書に載っているような話なら、テキストを開けばいいこと。“ここでしか聞けない”トークを大切にしている。

4. 参加型にする・ストレッチ

生徒さんに質問を投げかける参加型スタイルも羽鳥さん流。また高齢の方が対象の場合、長時間座ったままだと疲れてしまうので、ストレッチを30分間隔で組み込んでいる。

場所　窓と緑がある スペースをチョイス

自分で場所を探す場合は、窓があって緑が見えるスペースをセレクト。「心理学的に人間は、閉塞感のある場所にいると逃げたい気持ちになる傾向があります。そこで開放感を意識して選びます」（羽鳥さん）。テーマがアロマの場合、植物の話に展開しやすいのもメリット。

時間　開始時間は 生徒さんの状況を見て

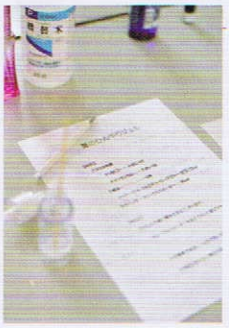
子育て中の生徒さんがいる場合は、午前中に行うのが鉄則。ワークショップ終了後にランチが出来るくらいの時間が喜ばれるのだとか。一方、OL が多い場合は仕事が終わった後を想定し、18 時半などに行うことが多いそう。

参加方法　自分が主催する場合は 紹介制に

自身が主催するワークショップの場合、生徒さんを募集するのではなく、紹介制にするのも工夫の一つ。「人が集まる場を、商品の勧誘に使う人もいますから。紹介者がいればトラブル時に間に入ってくれるので安心」（羽鳥さん）。

演出　香りや音楽などで 癒しを演出

場所がすでに決まっている場合、ディフューザーの香りや音楽など、人間の五感に訴える方法でリラックス空間を演出。「会場に入ってきた時の第一印象は特に重要。必ず受付で香りを焚きます」（羽鳥さん）。



資料　レジュメには 注意事項も忘れずに

当日行う内容を書いたレジュメを毎回必ず作成。アロマコスメなど、肌に直接触れるものを作る場合は、注意事項も書き添えるのもポイント。注意を促しトラブルを防ぐ。

講座後　ティータイムを設け、質問タイムをつくる

テーマの内容にもよるが、1～1時間半の講座が多いという羽鳥さん。最後は必ず、季節のブレンドハーブを使ったティータイムを設けている。世間話はもちろん、ワークショップで分からないことがあった時の質問タイムも兼ねているのだとか。

関係性　講師として務めるため、適切な距離を保つ

生徒さんとの間には、ある程度の距離を持って接しているという羽鳥さん。「仲良くなりすぎてしまうと、ワークショップでお金をいただくのが申し訳なくなってしまう」のだとか。人間関係のトラブルにも踏み込まないのも大切なこと。